

(笠を被った旅の女たちが江戸口御門より、入ってくる)

番士 「おい、その二人、この関所の中では笠を取れ！」

志づ 「はい、笠でございますか？こればかりは・・・ご勘弁下さい。」

番士 「その方たち、高札の一つ目に『関所を出入る輩 笠頭巾をとらせ通すべき事』と書いてあるのが目に入らぬのか！」

里 「ああ、そうございましたか！ですが、このようにお天道様が出ています間は“死害線”と申すまやかしの光線が出ており、それを地肌に浴びますと、すでに塔が立つてる幼馴染のお静にとつては、それはそれは一大事でございますゆえ・・・。」

志づ 「お里ちゃんだって人の事いえないでしょ！」

番士 「何をわけのわからんことを申しておるのじゃ。その方たち、女であるな。調べを行う。こちらへ参れ！」

里 「(意地でも傘は取らずに) 先を急いでおりますので、手短に・・・！」

番士 「だから傘は取れと申しておろうが！」

(女たち、渋々傘を取る)

(女たち、面番所へ行き、各々手形を差し出す)

番士 「その方たち、関所手形を改める・・・名を名乗れ。」

里 「はい、江戸、日本橋、あかね長屋、徳兵衛の娘』と』でございます。」

志づ 「同じく、与兵衛の娘』しづ』でございます。」

番士 「旅の目的は何じゃ？」

女二人 「はい、お伊勢参りでございます。」

番士 「じゃが・・・その方たち、女の二人旅とはぶつそうじゃな。それに下男もおらんのか？荷物はどうしておるのじゃ？」

志づ 「はい、荷物は飛脚に頼んでございます。」

里 「私共は、今江戸で流行のお伊勢参りにどうしても行ってみたいのでございます。」

番士 「ふーん、そうか。では、人見女のお福！(面番所内の福を呼び、向き直り) その方ら、改めを行なう！」
女二人 「嫌でございます！」

番士 「おぬしらの恥じらいもわからんではないが・・・高札の三つ目にも『関より外に出る女はつぶさに証文に引き合わせ通すべき事』と書いてあったであろう！」

志づ 「ですが、男は良くて、女だけ改めるなど、どうにも合点がいきませぬ。」

里 「お役人様、どうしてこの関所では、江戸から出る女“出女”には厳しいのでございますか？」

番士 「おお、そうじゃのう・・・出女と申すのはだな、まず、全国の大名から、各々の奥方と娘を奉公人として江戸に住まわせておるのじゃ。」

里 「奉公人？いい匂いがするのかしら？」

志づ 「人質のことでしょ！それは一体どうしてでございますか？」

番士 「大名の奥方と娘を奉公人、つまり人質として江戸に住まわせることによって、徳川の天下を良しとしておらん大名らが謀叛(むほん)を企てんようにする為じゃ。して、その人質の奥方と娘共が江戸から逃げ出して来んようにこの箱根の関所で厳しく監視しておるのじゃ。どうじゃ、わかったか？後ろにおる者たちもご理解頂けたか？では、人見女に改めてもらう。」

里 「嫌でございます。やはり、どうしても納得いきませぬ！」

志づ 「たしかに、たしかに！」

番士 「その方ら、むしろ役人にたてつくど申すのか？・・・全く・・・まあ、どうせ、人見女はこのように動かなくなつてしまつておるからのう。(手形に目をやり) んん？・・・里、それに静、この手形の印判(いんばん)が違ふようじゃが！さらに、当方の判鑑(はんかがみ)とも合つておらん。よつてこれは似非(えせ)手形じゃ！この関所を通す訳には参らん！一度江戸に戻り、手形を書き改めてもろつて参れ！」

里 「ええつ？確かにこの手形はとても大変な思いをして、ええつと・・・お・・・おする？おさる？」

志づ 「御留守居役です！」

里 「あつ、そ、そう、大変な思いをして御留守居役のお役人様より頂いてきたものでございます！どうか今一度お改め下さい！」

番士 「おぬしらがどんな思いをしてこの手形をもらうてきたかは知る由も無いが、確かにこれは似非(えせ)手形であるわ！おぬしら、さてはかような似非(えせ)手形でわしらの目を欺き、この箱根の関所を破るつもりでおつたな！関所破りは親殺しと同様の重罪、磔(はりつけ)であるぞ！」

志づ 「い、いえ、お待ち下さい、お役人様！そんなつもりはございません！・・・(何かひらめいて) あつ、そういえば、お役人様、長屋仲間の末吉さんから、お相撲さんと旅芸人は、手形がなくとも関所を通してもらえるつて話を聞いたのですが、それはまことでございますか？」

番士 「んん、まあ、そのようなこともないことは・・・ない。」

志づ 「でしたら、話が早いでございます！私どもは、実は旅芸人でございます・・・。」

里 「ええつ・・・？そうだったの・・・？」

志づ 「し・・・！芸人つてことにするの！」

里 「あつ！・・・そ、そうでございます。私どもはしが無い旅芸人でございます。どうかお見知り置きを。」

番士 「おお、そなたたち、何か怪しいと思うておつたが、旅芸人とは・・・。ならば、なぜそれを早く申さなんだ？この箱根の関所につめておると気が滅入つてくるからのお、芸を見るのが唯一の娯楽なのじゃ・・・して、そなたたちは何の芸をしておるのじゃ？」

(二人で後ろを向いて)

里 「・・・ねえ、お静ちゃん、どうするの？何か当てがあるんでしょ？」

志づ 「あるわけ無いでしょ！」

里 「ええつ・・・？何もできないのに芸人つて言つちやつたの？信じらんない！」

志づ 「どーしても、お伊勢参りに行くの！」

里 「お静ちゃん、思い、つよっ！」

志づ 「ねえ、お里ちゃん、何かできない？例えばお手玉とか？」

里 「お手玉？男を手玉にとかなら・・・。」

志づ 「・・・聞いた私が間違いだつたわ！」

番士 「おぬしら、かなり大きな声で、一体何を企てておるのじゃ？ヒソヒソ話のつもりか？早ようせい！」

志づ 「あ、それでは皿回しをお見せしたいと思います。」

番士 「おお、皿回しか？それは楽しみじゃ！では、早速見せてみい！」

里 「お静ちゃん、皿回しできるんだ！すごい！」

志づ 「わたしはできないけど、お里ちゃんならできそうでしょ？」

里 「ええつ・・・？いやいやいやいや、何を冗談を・・・。」

志づ 「・・・あの、お役人様、関所にお皿と棒なんてありますか？」

(皿と棒を借りる)

二人 「それでは、しづとさとの皿回し、はじまりはじまり！」

志づ 「それでは、何の変哲も無いこの皿をこの棒の上で回してみたいと思います！」

里 「上手く回りましたら、拍手ご喝采の程、よろしくお願いいたします！」

志づ 「(何となく回る) はいっ！如何でしょう？」

里 「いつもより多く回しております！」

番士 「おおっ、愉快じゃ愉快じゃ！周りの皆も『こんなものか』とは思いますがまあまあ楽しんでおったな！」

志づ 「よっしゃあ！」

里 「では、私どもはこのまま関所を通らせて頂きます！（と二人立ち去ろうとする）」

番士 「まてまて・・・残念じゃ、まことに残念じゃ！その方ら、はじめから芸人である事を明かしておればそのまま通してやらんこともなかったものを！」

里 「ですが、お役人様も周りの皆さまもお喜び下さっておりますが！」

番士 「芸はさておき、似非手形を以ってこの箱根の関所を通ろうとするなど不屈き千万！おぬしらをこのまま通すわけには参らん！詮議（せんぎ）が済むまで、しばし、獄屋へ入っておれ！」